

# みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

まちづくりの現場から考える “  
語り合う場のデザイン  
” <共同研究：グローバル時代における「寛容性／  
非寛容性」をめぐるナラティブ・ポリティクス>

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2023-10-03 キーワード: 作成者: 山, 泰幸 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/0002000013">https://doi.org/10.15021/0002000013</a>

# まちづくりの現場から考える “語り合う場のデザイン”

山 泰幸

## ナラティブ・ポリティクスの時代

現代社会は、真実かどうか分からない情報あるいは「フェイクニュース」で溢れかえっており、国際政治の舞台では、互いが自己を正当化し、相手を排撃するプロパガンダによる熾烈な駆け引きが行われている。現代社会はまさにナラティブ・ポリティクスの時代に突入しているといえるだろう。

ナラティブ・ポリティクスという視点は、「異人論」から着想を得たものである。文化人類学や民俗学においては、外部から訪れる他者、すなわち「異人」に対する歓待や排除、蔑視あるいは畏怖や憧憬などの観念や行動をめぐって、「異人論」と称される研究蓄積がある。とくに本研究における異人論への関心は、それが他者を排除する「村落共同体＝民俗社会」のシステムを抉り出したこと、さらに潜在する「神話＝フォークロア」といったナラティブが語り出されることによって排除のシステムが作動することを示唆している点である。

新型コロナウイルス感染症の世界的な大流行によって、欧米ではアジア系住民への差別や偏見に基づくヘイトクライムが横行したように、危機的状況においては、他者を排除する行為を正当化しようとするナラティブが立ち現われ、しばしば支配的なナラティブを構成するようになる。ちょうど今から100年前に発生した関東大震災において他者を排除するナラティブが席卷するなか、各地で大規模な殺戮、残虐行為が行われた。東日本大震災や熊本地震においても、このようなナラティブの亡霊が出現したことは記憶に新しい。

一方、地域社会では、さまざまなテーマについて自由に語り合う場がない。社会的問題、地域の抱える問題、個人の悩みを含めて、いわゆるマジメな話は話す側も躊躇するし、聞く側もどう対応していいかわからないため、一種のタブーになっているからである。しかし、誰もが自由に意見を言わない／言えない、このような状況においては、人びとは支配的なナラティブにただ従属して生きていくしかないように思われる。

異人論が指摘するような排除のシステムが作動するのも、異人とされる側とこれを迎える側とが、語り合う機会がなく、互いを知る機会がないため、相手に敬意を持つことが難しいからであると思われる。同様に、異人を迎える側の人びと同士も語り合う機会がなく、じつは互いを知る機会がないため、他者を排除するナラティブ・ポリティクスに巻き込まれるほ

かないのではないだろうか。

異人論は過ぎ去ったテーマではなく、いまだに解決されていない現代的な課題なのである。

## まちづくりと「異人問題」

以上のように、ナラティブ・ポリティクスという視点から、改めて異人論が筆者の関心事として浮上するようになったが、その理由の1つとして、十数年前から、まちづくりの実践的研究を行っていることも大きい。

まちづくりの支援者として、外部から地域に関わる研究者は、「よそ者」という意味で異人であると同時に、研究者が使用する専門的言語を解さない地域の人びとにとっては、異言語を話す者という意味でも異人となる。一方、研究者の方も、地域の人びとが話す言葉がわかっていない場合が多い。日本語を使用しているからといって、互に通じていると錯覚しているだけで、じつはほとんど通じていないのではないか。このことは、専門が異なる研究者の間も同様で、むしろ異なる分野の専門家同士の場合が、さらに言葉が通じていないと思われる。

言葉が通じないという意味で、現代社会のあらゆる現場に「異人問題」が横たわっていると筆者は考えている。近年、異なる分野の専門家との学際的協働、地域住民も含めた超学際的協働が求められているが、言葉が通じなければ、協働どころか、その手前で躓いてしまうだろう。このような状況を少しでも乗り越えていくためには、小さな語り合う場を確保することが必要となる。

## ナラティブ・ポリティクスに抗して

フランスのパリでは、日曜日の朝に、カフェに集まって、さまざまなテーマについて、自由に語り合う哲学カフェと呼ばれる集まりがある。コーヒー代さえ払えば、誰でも参加でき、名乗る必要もない。話したい人は話をすればよく、聞くだけでもかまわない。筆者は、留学中にパリで哲学カフェに出会い、まちづくりに役立つと直感し、いくつもの地域の現場に導入してきた。

まちづくりにとって、筆者がもっとも大切だと考えているのは、自由に語り合うことで、互いを知り、問題意識を共有し、少しでも何かを一緒に協力して変えていくことができるような状態を創り出すことである。そのためには、人びとが

### 山 泰幸 (やま よしゆき)

関西学院大学人間福祉学部教授。専門は民俗学、思想史、社会文化理論。著書に『江戸の思想闘争』(KADOKAWA 2019年)、共編著に『異人論とは何か—ストレンジャーの時代を生きる』(ミネルヴァ書房2015年) などがある。



徳島県東みよし町での哲学カフェの様子 テーマ「愛と幸福」(2022年9月18日、筆者撮影)

集まって、実感をもって語り合えるような小さな場が必要なのである。そこから、自分たちの未来をともに創造するナラティブをデザインすることも可能となるだろう。

このような小さな語り合う場を確保することは、同時に、現代社会に猛威を振るうナラティブ・ポリティクスに抵抗するための、ささやかではあるが、しかし確固たる拠点となるはずである。

本研究では、人類学、民俗学、文学、社会学など多様な分

野の研究者が、現代社会におけるナラティブ・ポリティクスに抗するための手掛かりを模索してきた。その過程で見えてきたのは、説話や民話などの物語を人類社会共存のための文化遺産として再活用する道筋を見出すとともに、さまざまな現場において、小さな語り合う場を確保し、私たち自身とともに新たなナラティブをデザインしていくほかないということである。いま、その知恵と工夫が求められている。